エドワード２世による政治的無能と嫌悪

The Incompetence and Distaste for Government by Edward II

川　瀬　　進

分野：経済史：イングランド経済史 332.33

キーワード：封建制（Feudalism）、アジェンダ（Agenda：政策課題、政策指針）、マグナ＝カルタ（Magna Carta：the Great Charter of the Liberties of England：大憲章）、コンフィルマティオ＝カルタニム（Confirmatio Cartanim：the Confirmation of the Charters：大憲章確認書）、ローズ＝オーディナーズ（Lords Ordainers：行政改革勅令起草諸侯委員会）、オーディナンセズ（Ordinances：行政改革勅令）

目　次

Ⅰ はじめに
Ⅱ ガスコーニュ
Ⅲ フランドル
Ⅳ 摂政
Ⅴ 王位継承
Ⅵ オーディナンセズ（Ordinances：行政改革勅令 1311.8）
Ⅶ 廃位（Deposition, 1327.1.24）
Ⅷ おわりに

Ⅰ　はじめに

父エドワード１世（Edward Ⅰ：長脛王Longshanks：スコットランド鉄鎚王Hammer of the Scots, 1239.6.17-1307.7.7：在位1272-1307）が、1307年7月7日、スコットランド遠征中、赤痢（dysentery）により崩御したため、翌日の7月8日、ウェイルズのカナボーン城（Caernarvon Castle）で生まれた４男エドワードが、イングランド王エドワード２世（Edward II, Prince of Wales, 1284.4.25-1327.9.21：在位1307-1327）になった。

この時、イングランド王としてエドワード２世に課せられたアジェンダ

（Agenda：政策課題、政策指針）は、当然、イングランド王国を平穏にし、王国民の安全と安心とを確保することであった。

だが、エドワード２世がイングランド王位を継承した時は、父エドワード１世が封建制度（Feudalism）を確固たるものにするために、父エドワード１世が仕掛けたスコットランド遠征に、同伴していた時であった。

そこで、エドワード２世の直近のアジェンダは、スコットランド遠征を良い形で終えることであった。

父エドワード１世は、スコットランド遠征を仕掛け、巧みな指導力で、スコットランド軍を追い詰めたが、エドワード２世は、その指導能力がなかった。

それは、何故なのであろうか。

争いごとを巧みにコントロールする指揮官としてのセンスが、生まれ以てなかったのであろうか。

エドワード２世は、生まれたときから、父エドワード１世が、ガスコーニュ、フランドルでの領土問題に対処していて、ほとんど王宮に居なかったので、父エドワード１世から、直接、王国内の治安を安定にするための軍事力、政治経済学を身に付けた王位学を学ぶことがなかった。

また、母エリナ＝オヴ＝カスティル（Eleanor of Castile, 1241-1290.11.28）も、夫エドワード１世に同伴して、王宮にあまりいなかった。

その後、エドワード２世は、父エドワード１世と同伴し、スコットランド遠征に出向いた。だがその遠征のなかでも、エドワード２世は、戦闘方法を学ばなかったし、学習もしなかった。

スコットランド遠征そのものに、嫌疑・嫌悪を抱いていたのであろうか。

エドワード２世の性格、能力は、幼少時代、王太子時代、プリンス＝オヴ＝ウェイルズ（Prince of Wales）時代、摂政時代の家庭環境に影響されたのであろう。

イングランド王国民にとって、政治的・経済的・軍事的能力に長けた国王ならば、不平不満は、出ないであろう。

だが、その逆では、王国民にとって不利益を被る。

特に、貴族たち、すなわちアール（Earl）、バロン（Baron）、ナイト（Knight）、ジェントリー（Gentry）のような支配者階級と、都市上流階級の人びとの意思とは逆では、支持できない国王となる。

貴族たちの富の成長、すなわちイングランドの経済発展をなすことによって、真の国王となるのである。

この経済発展とは、当然、王権の拡大ではなく、貴族たちの自由な発想・政策によってもたらされるものであった。

現在2015年、800年前の1215年に、イングランドの列強貴族たちは、自身たちの権利と自由を得るため、イングランド王ジョン（King John, Known as Lackland（欠地王）, also Sword-of-Lath（軟弱剣王）, 1167.12.24-1216.10.19：在位1199-1216）に対し、1215年6月15日、イングランド南東部のラニーミード（Runnymede）草原にて、１つの法律文章であるマグナ＝カルタ（Magna Carta：the Great Charter of the Liberties of England：大憲章）に、印章を押させ調印、発布させた。

この1215年6月15日のマグナ＝カルタに対し、有力な貴族たちは、イングランド王エドワード１世に対し、更なる権利と自由を得るために、さらに進化させたマグナ＝カルタ（Magna Carta）を考えるようになった。

すなわち、有力な貴族たちは、1279年10月10日、更なる権利と自由を求め、エドワード王太子に対し、「コンフィルマティオ＝カルタニム（Confirmatio Cartanim：the Confirmation of the Charters：大憲章確認書）」を、調印させた。

何故、イングランドの有力な貴族たちは、エドワード王太子に対し、1297年10月10日、更なる権利と自由とを求めたマグナ＝カルタ（Magna Carta：Great Charter）、すなわ「コンフィルマティオ＝カルタニム（Confirmatio Cartanim：the Confirmation of the Charters）」に、印章を押させたのであろうか。

そこで本稿では、エドワード２世の幼少時代、家庭環境に影響を与えたガスコーニュ、フランドル問題を念頭に置いて、エドワード２世が、なぜ王太

子時代、進化した1297年10月10日のマグナ＝カルタ（Magna Carta）に印章を押させられたのであろうか、また、エドワード２世がイングランド王国の政治・経済発展を支えている王国民、特にアール、バロン、ナイト、ジェントリー、都市上流階級の人びとに、支持されなくなったのかを考察する。

Ⅱ　ガスコーニュ

エドワード１世の４男エドワード（後のエドワード２世）が、ウェイルズのカナボーン城（Caernarvon Castle）で、1284年4月25日に生まれた。

本来は、４男エドワードは、イングランド王国内、および統治下で生まれたであろう。

当時イングランドは、ウェイルズ公国を、イングランドに吸収、合併、併合した時期であり、そこで、エドワード１世は、ウェイルズ公国民の感情を多少でも抑えようとして、敢えて意図的に、４男の出生地を、このウェイルズの地に選んだ。

この４男の意図的なウェイルズでの出生地の決定は、ウェイルズ公国民に対し、イングランドへの併合後、多少でもイングランドに親密感を持たせ、ウェイルズでの統治を容易にしたい、とするエドワード１世の策略であった。

ここで１つ注意しなければならないことがある。

それは、ウェイルズのカナボーン城で生まれた王子が、必ずしもこの現時点では、次期イングランド王位を継承するとは決まっていなかった、ということである。

というのは、４男エドワードが生まれた時点では、兄である３男アルフォンソ王太子（後のチェスター伯アルフォンソ、Alphonso, Earl of Chester, 1273.9.24-1284.8.19）が存命であったからである。

３男アルフォンソは、長男ジョン（John, 1266.7.13-1271.8.3）、２男ヘンリー（1268.5.6-1274.10.14）がすでに亡くなっており、男系の最年長者として、言い換えると、すでにイングランド王国の王位継承者として育てられていた。

だが、このアルフォンソ王太子も、1284年8月19日に、亡くなってしまっ

た。

このアルフォンソ王太子の死は、４男エドワードが生まれて、４カ月半少し過ぎのことであった。

このことにより、４男のエドワードが王太子となり、イングランド王位継承者となった。

４男エドワードは、幼少時、父エドワード１世が、領土の安定、拡大のため、宮廷に滞在していることが少なく、また母エリナ＝オヴ＝カスティル（Eleanor of Castile, 1241-1290.11.28）とは疎遠であり、さらに兄弟もすべて女性であり、圧倒的に女性社会の中で育った[1)]。

なお、母エリナ＝オヴ＝カスティルは、エドワード王太子の婚約者・ノルウェイ王女マルグレーテ（Margrete, 1283.4.9-1290.9.26：ノルウェイの乙女 The ‘Maid of Norway’：スコットランド女王マーガレット Margaret queen of Scots, 1286-1290）の追悼のため、夫エドワード１世と、スコットランドへ行く途中、リンカーン（Lincoln）近郊のハービー（Harby）で、1290年11月25日、病気で亡くなった[2)]。

母エリナ＝オヴ＝カスティルは、夫エドワード１世の戦いに、常に同行しており、宮廷で育っている６歳のエドワード王太子とは、常に傍にいなかったので、疎遠にならざるを得なかった。

また、６歳のエドワード王太子は、生まれたときから、女系家族の中で、育たるを得なかった。

スコットランド王位を奪取しようとしていたエドワード１世に、懸念していたトラブルが、1292年頃から、表面化し出した。

それは、イングランドの商業船の船員が、ガスコーニュの１地方バイヨンヌ（Bayonne）とそれ以外のガスコーニュ（Gascogne）諸港の船員たちと連

1）Plantagenet Somerset Fry, ***The King & Queens of England & Scotland***, reprinted of 1990, edition, A Dorling Kindersley Book, 1993, p.58.

2）Maurice Powicke, The Thirteenth Century 1216-1307, in George Clark, edition, ***The Oxford History of England***, Vol.4, Second edition, reprinted of 1953, edition, Oxford University Press, 1992, p.513.

携し、フランスのノルマン人と対抗していたことであった。

両国の商船隊が、お互いに海賊行為と殺人行為を行っていたのである[3)]。

この両国の商船隊の行為が、その後、大問題へとなった。

ガスコーニュは、1152年5月8日に、アキテーヌの女子相続人アリエノール＝ダキテーヌ女公（Aliénor d'Aquitaine：Eleanor of Aquitane, 1124-1201.4.1）が、ノルマンディー公＝アンジュー伯アンリー＝プランタジネット（Henry Plantagenet, Duc de Normandie, Count de Anjoum：後のヘンリー２世 Henry II, 1133.3.25-1189.7.6：在位1154-1189）と、1152年に再婚[4)]した時から、イングランド領になった。

また、ガスコーニュ、アジネ（Agenais）を含むアキテーヌ公領（the Duchy of Aquitaine）が、イングランド王国の支配地になり、また1259年12月4日のパリ条約（Traité de Paris：The Treaty of Paris）[5)]で、フランス王の封土のとしてのイングランド王領地となった。

だが、このパリ条約によって、イングランド王ヘンリー３世（Henry III, 1207.10.1-1272.11.16：在位1216.10.28-1272.11.16）は、フランス王・ルイ９世聖者王（Louis IX, le Sainte, 1215.4.25-1270.8.25：在位1226-1270）を、自身の封建領主として認めざるを得なくなった。

すなわち、ヘンリー３世は、イングランドでは国王であるが、フランスで

3）当時、イングランドとガスコーニュとの結び付きは、経済的緊密さが大であった。ガスコーニュ内のボルドー、アジネは、ワインの１大産地であり、主としてイングランドに輸出していた。逆にガスコーニュは、イングランドからの毛織物、皮革、穀物を、輸入していた。ガスコーニュの歳入が増加すればするほど、高利益をもたらし、イングランド王室としては、手放したくない地域であった。バイヨンヌ商船が、高利益の上がる多量のワインか毛織物を積載して、イングリッシュ海峡を横断していた時、ノルマン船舶によって拿捕された。いわゆる、ノルマン船舶による海賊行為である。逆に、シンク＝ポーツ（Cinque Ports：５港連合）からのイングランド船舶も、ノルマンディーからの商船を拿捕していた。

・T. F. Tout, The History of England: from the Accession of Henry III. to the Death of Edward.（1216-1377）, in William Hunt and Reginald L. Poole, edited, *The Political History of England*, Vol. 3, reprinted of 1905, edition, AMS Press, Kraus Reprint Co., 1969, p.186.

4）A. L. Poole, *The Oxford History of England*, Vol. 3, Domesday Book to Magna Carta 1087-1216, Second Edition, reprinted of 1955, ed., Oxford University Press, 1986, p.163.

は、封主ルイ９世聖者王の管轄下にあるする封臣アンリー公爵（Henry, Duc de Aquitaine）という微妙な身分関係になったのである。

このような微妙な両国の関係のなか、商業的利害関係に関して、懸念していたトラブルが、さらに大きくなった。

そのトラブルのもとには、もともと長い間、イングランド東南岸のシンク＝ポーツ（Cinque Ports：５港連合）[6]からの商業船の船員と、ノルマンディー貿易業者との間に、商業的ライバル関係があり、小さな私的なトラブルがあった。

そのライバル関係にトラブルをもたらしたのは、1293年５月15日、シンク＝ポーツ（Cinque Ports：５港連合）からの艦隊（商船隊）と、ノルマン艦隊（商船隊）とが、イングランド＝ガスコーニュ連合船隊を結成し、ブルターニュ（Brittany）のセント-マチュー岬（Cap Saint-Mathieu（Mahé）沖で、前もって準備されていた正々堂々の会戦、すなわちセント-マチュー沖戦争（Battle off Saint-Mathieu（Mahé））となり、多数の小艦隊を要するイングランド＝ガスコーニュ連合船隊の圧倒的勝ちでの戦争であった[7]。

このセント-マチュー沖戦争の勝利したイングランド＝ガスコーニュ連合船隊は、すぐにポーツマスに帰り、戦利品を陸揚げし、さらにフランスのサ

５）・ヘンリー３世とルイ９世によって締結された、1259年12月４日のパリ条約について、１つ注意しなければならないことがある。それは、この条約によって、ヘンリー３世は、ガスコーニュ、アジネ（Agenais）を含むアキテーヌ公領を領有することになったが、その代わりに、今まで保持していたノルマンディー（Normandy）、アンジュー（Anjou）、メーヌ（Maine）、トゥレーヌ（Touraine）、ポワトゥー（Poitou）の相続権を、最終的に放棄せざるを得なくなった、ということである。このことは、歴代のイングランド王の野望であったアンジュー帝国の縮小、損失を意味していた。

・T. F. Tout, *The Political History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p.105.

・David C. Douglas and George W. Greenaway, *English Historical Documents*, Vol. 3, Second Edition, Reprinted of 1953, edition, Routledge, 1981, pp.376-379.

６）シンク＝ポーツ（Cinque Ports：５港連合）とは、イングランド東南岸のサンドウィッチ（Sandwich）、ドーヴァー（Dover）、ハイズ（Hythe）、ロムニー（Romney）、ヘイスティングズ（Hastings）の５都市港が、各都市の利益を守るために結成された同盟である。また、シンク＝ポーツは、かなりの数の船舶を建造し、ノルマン船の海賊行為を取り締まるため、またフランス遠征に対しても、活躍した５港連合同盟であった。

７）・Maurice Powicke, *The Oxford History of England*, Vol.4, *op. cit.*, p. 644.

・T. F. Tout, *The Political History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 186.

ントーンジュ（Saintonge）の商業都市ラ＝ロシェール（La Rochelle）を略奪した[8)]。

このようなことから、小さなトラブルが、さらに公的トラブルへと大きくなった。

このトラブルの事情聴取をするため、またラ＝ロシェールの損害賠償を要求するため、1293年10月27日、封主のフィリップ４世端麗王（Philipe IV, le Bel, 1268-1314.11.29：在位1284-1314）の議会は、封臣のアキテーヌ公＝エドワード１世に対し、1294年1月にパリの法廷に出頭するよう命じた[9)]。

だが、この召喚に対して、エドワード１世は、イングランド王であるという理由のもとに、出頭をきっぱりと拒否した。

そして、エドワード１世は、フランスとの和平交渉のために、交渉人として、自身の弟であり、５港連合統括長官（Lord Warden of the Cinque Ports）でもあるランカスター伯エドマンド（Edmund, Earl of Lancaster, 1245.1.16-1296.6.5）を、1294年に、パリに送った。

だが、ランカスター伯エドマンドは、フィリップ４世端麗王との和平交渉に、失敗した[10)]。

エドワード１世は、1294年4月21日、再度パリの法廷に来るよう召喚された[11)]。

だが、エドワード１世は、再度、出廷を拒否した。

このことにより、1294年5月19日、パリの法廷から、エドワード１世は、封建的義務不履行者とされ、有罪判決を受けた[12)]。

その判決により、同1294年5月19日に、封主フィリップ４世端麗王は、封

8）・Maurice Powicke, *The Oxford History of England*, Vol.4, *op. cit.*, p. 644.
・T. F. Tout, *The Political History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 186.
9）Maurice Powicke, *The Oxford History of England*, Vol.4, *ibid*, p. 646.
・T. F. Tout, *The Political History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 187.
10）・T. F. Tout, *The Political History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 187.
・J. R. Moreton Macdonald, *A History of France*, Vol. 1, reprinted of 1915, edition, AMS Press INC.: New York, 1971, p. 183.
11）Maurice Powicke, *The Oxford History of England*, Vol.4, *op. cit.*, p. 648.
12）Maurice Powicke, T*he Oxford History of England*, Vol.4, *ibid*, p. 648.

臣アキテーヌ公エドワード（Edward, Duc de Aquitaine）のフランスにある全領土を没収する宣言を行った[13)]。

この宣言により、ガスコーニュのフランスへの通常引き渡しが、急ピッチで、ガスコーニュの領主たちの承諾のもと行われた。そして、封主フィリップ４世端麗王は、封臣エドワード１世のフランスでの領地ガスコーニュを占領した[14)]。

ガスコーニュが占領された時、ガスコーニュのナイト（Knight：騎士）であるサー＝アーノルド＝ドゥ＝ギャヴスタン（Sir Arnaud de Gabaston, 1247-1302）が、フランス軍に捕らえられ監禁された。

この時同時に、彼の息子であるピエール＝ドゥ＝ギャヴスタン（Piers de Gaveston, c. 1284-1312.6.19）もフランス軍に捕らえられ監禁された。

その後、監禁から逃れた親子を、エドワード１世は、親のガスコーニュのナイトであるサー＝アーノルド＝ドゥ＝ギャヴスタンの軍事的功績を称え、王宮に向かいいれた。

またその時、エドワード１世は、ピエール＝ドゥ＝ギャヴスタンも、エドワード王太子の義理の兄弟として、遊び友達として、王宮に招き入れた。

この時、ピエール＝ドゥ＝ギャヴスタンに対するエドワード１世の気持ちは、王宮内で、遊びながら、エドワード王太子に、騎士道精神を植え付けてもらいたいという気持ちが大であった。

だが、この強靭で、才能があり、野心的なピエール＝ドゥ＝ギャヴスタンは、エドワード王太子、その後のエドワード２世に多大な影響を与えた人物であった[15)]。

ガスコーニュが占領されたことに対し、イングランド議会は、1294年6月初旬、ガスコーニュへの軍事行動に同意し、そして、エドワード１世は、フランスに対し宣戦布告し、フランスとの戦争が決定的となった[16)]。

13）Maurice Powicke, ***The Oxford History of England***, Vol.4, ***ibid***, p. 648.

14）T. F. Tout, ***The Political History of England***, Vol. 3, ***ibid***, p. 187.

15）Michael Prestwich, ***The Three Edwards***, War and State in England 1272-1377, Second edition, reprinted of 1990, Routledge, 2013, p.71.

早急に、エドワード１世は、対フランス戦争のための準備を開始した。

すなわち、具体的には、イングランド艦隊（商船隊）の組織化と、外国同盟国を探すことであった[17)]。

封主フィリップ４世端麗王は、1295年春に、自身の弟ヴァロワ伯シャルル（Charles, Count of Valois, 1270.3.12-1325.12.16）に対し、商業利益の高いフランドル伯ギイ＝オヴ＝ダンピエール（Guy of Dampierre, Count of Flanders, c. 1226-1305.3.7）の領地、およびブルターニュ（Brittany）を含む全アキテーヌ公領を、武力制圧させた[18)]。

エドワード１世は、1295年７月、ウェイルズの反乱を鎮圧させたことにより、ウェイルズからイングランド軍を撤収させ、対フランス戦争のためのイングランド海軍の軍事力を強化し始めた。

その海軍の軍事力の強化の１つとして、シンク＝ポーツ（Cinque Ports：５港連合）のルーズな組織の強化である[19)]。

また、軍事強化の１つとして、エドワード１世は、自身の傀儡政権であるスコットランド王ジョン＝ベイリャル（John Balliol, c. 1249-1314.11.25：在位1292-1296）に、スコットランド兵をフランスに送ることや、それに掛かる経費の増税を強要した[20)]。

この強引なやり方に反発したスコットランド王国の重臣、ビショップ（Bishop）、アール（Earl）、バロン（Baron）たちが、1297年７月に、極秘会議を開催させ、エドワード１世への抵抗を見せた。

その極秘会議の内容は、スコットランド王国を支援してくれる外国の同盟国を、見つけることであった。

その同盟国は、現在戦争が進行しているイングランドの敵対国フランスで

16）・Maurice Powicke, *The Oxford History of England*, Vol.4, *op. cit.*, p. 648.
・T. F. Tout, *The Political History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 188.
17）Maurice Powicke, *The Oxford History of England*, Vol.4, *op. cit.*, p. 649.
18）T. F. Tout, *The Political History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 191.
19）Maurice Powicke, *The Oxford History of England*, Vol.4, *op. cit.*, p. 655.
20）Chris Tabraham, with photographs by Colin Baxter, *The Illustrated History of Scotland*, reprinted of 2003, edition, Lomond, 2010, p. 68.

あった。

その結果、1295年7月5日、スコットランド王国は、フランス王国との相互防衛協力同盟を結んだ[21)]。

この相互防衛協力同盟は、後に‘auld alliance’と呼ばれた[22)]。

このことに危機感を感じたエドワード１世は、ウェストミンスター（Westminster）にて、対フランス、対スコットランド、対ウェイルズの軍事費捻出のため、1295年11月、議会（Parliament：後の呼び名、模範議会：the Model Parliament）を開催させた[23)]。

全アキテーヌ公領を、武力制圧されたことに対し、危機感を抱いたフランドル伯ギイ＝オヴ＝ダンピエールは、この危機を回避させるため、自身の王女フィラピーナ（Philippina：Philippa, d. 1306, Paris）と、エドワード１世の王太子エドワード（Edward, Prince of Wales：後のエドワード２世）とを結婚させて、エドワード１世の力を借りようとした。

また、11歳の王太子エドワードは、この婚姻政策を理解し、自身の治世時においても、活用することになった[24)]。

なお、この1296年当時、イングランド王エドワード１世の命を受けた軍司令官・第６代サリー伯ジョン＝ドゥ＝ワレンヌ（John de Warenne, 6th Earl of Surrey, 1213-1304.9.29）遠征軍が、辺境伯領へと北上し、ダンバー＝キャッスル（Dunbar Castle）近くで、スコットランド軍・バーデンノホ領主ヨハネ３世カミン（John III Comyn, Lord of Badenogh, d. 1306.2.10）軍と交戦状態になっていた。

この交戦、すなわち1296年4月27日のダンバー闘争（Battle of Dunbar）は、

21）T. F. Tout, ***The Political History of England***, Vol. 3, op. cit., p. 194.

22）Chris Tabraham, with photographs by Colin Baxter, ***The Illustrated History of Scotland, op. cit.***, p. 68.

23）T. F. Tout, ***The Political History of England***, Vol. 3, ***op. cit.***, p. 195.

24）エドワード２世は、長女エリナー＝オヴ＝ウッドストック（Eleanor of Woodstock, 1318.6.18-1355.4.22）を、グルデルン公レイナルド２世と、２女ジョーン＝オヴ＝イングランド（Joan of England, 1321.7.5-1362.9.7）を、スコットランド王ディヴィッド２世（David II, 1324.3.5-1371.2.22）と政略結婚させた。

イングランド軍のテクニカル的な勝利で終わり[25)]、その結果、イングランド軍が、スコットランドに駐留するようになった。

Ⅲ　フランドル

フランドルでの危機感が、さらに増していたため、フランドル伯ギイ＝オヴ＝ダンピエールは、1296年に、フランス王フィリップ４世端麗王との主従関係を解消し、復讐心に燃え、経済的に友好国であるエドワード１世と同盟を結ぶことを決定した[26)]。

一方、エドワード１世にとっても、当時、フィリップ４世端麗王と敵対関係にあり、両者の目的が合致し、エドワード１世と、フランドル伯ギイ＝オヴ＝ダンピエールとが、1297年1月7日に、同盟を結んだ[27)]。

なお、このフランドル伯ギイ＝オヴ＝ダンピエールの復讐心、そして同盟の経緯を、詳述すると以下の通りになる。

フィリップ４世端麗王は、経済的に豊かなフランドル伯領に対し、税の徴収を、1288年に、フランドル伯ギイ＝オヴ＝ダンピエールに要求した。この要求が原因で、フィリップ４世端麗王と、フランドル伯ギイ＝オヴ＝ダンピエールとの間に、1294年、緊張が高まった。

フランドル伯領は、もともとフランク王国であったが、フランク王国分裂の際、843年のヴェルダン条約（the Treaty of Verdun）、および870年のメルセン条約（the Treaty of Mersen）にて、東西フランク王国（後のフランス王国と神聖ロマ帝国）の緩衝地帯として、独立性を確保しながら発展していった。

だがその後、フランス王権が強化されるにつれて、フランドル伯の権力が低下していった。

25）・T. F. Tout, *The Political History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 197.
・Maurice Powicke, *The Oxford History of England*, Vol.4, *op. cit.*, p. 614.
・Ronald Nicholson, *Scotland*: The Later Middle Ages, The Edinburgh History of Scotland, Vol.2, reprinted of 1974, edition, OLIVER & BOYD, 1978, p.50.
26）J. R. Moreton Macdonald, *A History of France*, Vol. 1, *op. cit.*, p. 183.
27）T. F. Tout, *The Political History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 193.

フランドル伯の権力が低下しても、フランドル伯領の諸都市（イーベル（Ypres）、ヘント（Ghent）、ブリュージュ（Bruges）、リール（Lille））は、独立性を保持し、イングランドからの良質な羊毛の輸入し、そしてそれを毛織物として輸出することにより、経済力を上げ、貿易商業都市として発展していった。

その商業都市であるフランドルとイングランドとの増加しつつある関税収入にフィリップ４世端麗王が、横やりを入れてきた。

その横槍とは、フランドル伯領への税徴収である。

その税徴収を、フランドル伯ギイ＝オヴ＝ダンピエールが渋ったため、1295年、フィリップ４世端麗王は、自身の弟ヴァロワ伯シャルルに命じて、彼を収監し、彼の領地を没収しようとした。

これに対し、フランドル伯ギイ＝オヴ＝ダンピエールは、商業的に相互依存関係の強いイングランド王エドワード１世に助けを求めた。

その助けの一環として、フランドル伯ギイ＝オヴ＝ダンピエールは、自身の王女フィラピーナと、エドワード１世の王太子エドワードとの結婚を考えた。

この情報を得た封主フィリップ４世端麗王は、封建的契約の裏切り行為として、フランドル伯ギイ＝オヴ＝ダンピエールと、彼の息子２人とを収監した[28)]。

封主フィリップ４世端麗王は、1296年、フランドル伯ギイ＝オヴ＝ダンピエールに、再度、パリに出頭を命じ、賠償金を支払うまで、またフランドル領地を引き渡すまで、その領地を、王の監視下に置いた。

なお、フランドル伯ギイ＝オヴ＝ダンピエールの王女フィラピーナは、パリにて収監されたままであった。

これらの屈辱対し、フランドル伯ギイ＝オヴ＝ダンピエールは、封主フィリップ４世端麗王への復讐を考えるようになり、結果的に、封主との封建的

28）なお、フランドル伯ギイ＝オヴ＝ダンピエールの王女フィラピーナは、パリにて1306年、死ぬまで収監された。

契約を解除し、イングランド王エドワード１世に助けを求め、エドワード１世と、1297年1月7日に、同盟を結んだのである。

対フィリップ４世端麗王への打倒に燃えていたエドワード１世は、1297年2月24日、ガスコーニュへの戦争計画を、ソールズベリーでのイングランド議会に求めたが、反対された[29)]。

フランドル伯ギイ＝オヴ＝ダンピエール軍は、1297年8月20日のフュルヌの戦い（Bataille de Veurne：Battle of Furnes）で、フランス軍に、敗北した[30)]。

議会によるガスコーニュ戦争の反対にも怯まず、エドワード１世は、自身の戦争計画に賛成してくれた諸侯と軍隊を組織し、1297年8月24日、フランドル伯ギイ＝オヴ＝ダンピエールが、フランス軍と戦っているフランドルに向け出航した[31)]。

Ⅳ　摂　政

エドワード１世が、1297年8月24日以降、イングランドを留守にしたため、13歳の王太子エドワードが、摂政（Regent）として、イングランド王国内の政務を、取り扱うことになった。

摂政となったエドワード王太子は、２か月も経たないうちに、重要な事象が起き、政務を、ヨリ難しくさせられた。

それは、イングランドとスコットランドとの戦いである。

すなわち、1297年9月11日、スコットランド総督・第６代サリー伯ジョン＝ドゥ＝ワレンヌ（John de Warenne, 6th Earl of Surrey, 1213-1304.9.29）が、愛国心の強いウィリアム＝ウォレス（William Wallace, c. 1270-1305.23）の率いるスコットランド軍と、スターリング＝ブリッジの戦い（Battle of Stirling Bridge）で敗北したことである[32)]。

29）T. F. Tout, *The Political History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 202.
30・Maurice Powicke, *The Oxford History of England*, Vol.4, *op. cit.*, p. 669.
・J. R. Moreton Macdonald, *A History of France*, Vol. 1, *op. cit.*, p. 183.
31）T. F. Tout, *The Political History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 205.

この敗北のニュースは、直ちに、全エドワード１世支持者たちに伝わり、摂政エドワード王太子と側近たちは、イングランド全体が一致団結し、オール＝イングランドを創設しなければならないと考え、反エドワード１世のバロンたちと、手を組むことになった[33)]。

つまり、摂政エドワード王太子は、王権の規制・封建貴族の権利を記した、1215年のマグナ＝カルタ（Magna Carta：大憲章）[34)] を、再確認させようとしているバロンたちに譲歩しなければならなくなった。

その結果、1297年10月10日に、摂政エドワード王太子は、イングランド議会により、1215年のマグナ＝カルタ（Magna Carta：大憲章）を遵守する、有名な「コンフィルマティオ＝カルタニム（Confirmatio Cartanim：the Confirmation of the Charters：大憲章確認書）」の調印、そして、1297年のマグナ＝カルタの発布を、余儀なくさせられたのである[35)]。

このコンフィルマティオ＝カルタニムの調印、そして1297年のマグナ＝カルタの発布は、封建貴族にとって、自身たちの権利を、王に再確認してもらう上で、非常に良い法律であった。

32）Michael Prestwich, ***The Three Edwards***, ***op. cit.***, p. 29.

33）Cf. Michael Prestwich, ***The Three Edwards***, ***ibid.*** p. 29.

34）今年、2015年2月3日、１日限りで、現存する４つのオリジナルなマグナ＝カルタ（Magna Carta：大憲章）が、大英図書館に展示された。著者（＝川瀬）と学生とのゼミ研修で、大英博物館にて、何度か、このオリジナルなマグナ＝カルタの２つを見に行った。この内の１つは、丸い深緑のワックスに印章が押されたグレート＝シール（the Great Seal）を、シルクの帯で留められているものであった。なお、今年、2015年8月11日（火）、マグナ＝カルタ発布800周年の記念行事が行われているソールズベリー大聖堂（Salisbury Cathedral）のチャプター＝ハウス（Chapter House）に、オリジナルなマグナ＝カルタを見に行った。ソールズベリー大聖堂に敷地内に、記念行事の１つとして、（The Baron's Charter）があり、ジョン欠地王に対し、マグナ＝カルタの調印を迫った25人のバロンたちをモチーフにした25個の像の内、いくつかが、出迎えてくれた。チャプター＝ハウス内のやや奥に、白いテントが張られ、薄暗くされた中に、オリジナルのマグナ＝カルタがあった。このオリジナルなマグナ＝カルタには、グレート＝シールをシルクで留めた跡が残っていたが、グレート＝シールは無かった。おそらく、ソールズベリーのマグナ＝カルタのグレート＝シールは、どこかに保管されているのであろう。

35）・Michael Prestwich, ***The Three Edwards, op. cit.***, p. 29.

・Maurice Powicke, ***The Oxford History of England***, Vol.4, ***op. cit.***, p. 683.

・David C. Douglas, by General Editor, ***English Historical Documents,*** Vol. 3, 1189-1327, Harry Rothwell, reprinted of 1975, edition, Routledge, 1996, pp. 485-486.

だが、エドワード１世にとっては、王権を規制されるので、不満の残る法律であった。

なお、ここで１つ注意しなければならないことがある。

それは、1297年のマグナ＝カルタを発布させるために、すなわちコンフィルマティオ＝カルタニムに、調印したのが、エドワード１世ではなく、摂政エドワード王太子であるということである。

というのは、コンフィルマティオ＝カルタニムの調印、そして1297年のマグナ＝カルタの発布の時、エドワード１世は、イングランドにいなく、1297年8月24日から、1298年3月14日まで、フランドル伯ギイ＝オヴ＝ダンピエールの支援のため、フランス軍と戦うため、フランドルにいたからである。

ヨリ具体的にいうと、エドワード１世は、ガスコーニュ奪回を念頭に置き、フランス軍から苦戦を強いられているフランドル伯ギイ＝オヴ＝ダンピエールを支援するため、1297年2月2日に、同盟を結び、そして、同年の1297年8月24日に、フランス遠征のため、軍隊を引き連れ、フランドルに向け出航していたからである。

摂政エドワード王太子にとって、このコンフィルマティオ＝カルタニムの調印は、今後の王権を左右するほど、重要な事柄であった。

もし、摂政エドワード王太子が、イングランド政治、経済に興味、あるいは才能があったならば、その後の自身の王権の強化のため、このコンフィルマティオ＝カルタニム、ひいては1297年のマグナ＝カルタに対し、アクションを起こし、停止、あるいは破棄していたであろう。

摂政エドワード王太子が、このコンフィルマティオ＝カルタニム、および1297年のマグナ＝カルタに対し、何もアクションを起こしていなかったので、イングランド王国の政治、経済、軍事に関し、嫌悪を抱いていたのであろう。

このイングランドの遠征軍は、フランドルにおいて、あまり功を奏しなかった[36)]。

フランドルでの交戦状態が続く中、エドワード１世の忠実な下臣であり、

36）T. F. Tout, *The Political History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 210.

また、フィリップ４世端麗王と私的な友人であるドミニカ修道士であった、ダブリン大司教ウィリアム＝オヴ＝ホサム（William of Hotham：ウィリアム＝ホート William Houghuon, ? -1298）が、両者の調停に入った[37)]。

その結果、1297年10月7日、ヴィル＝サン＝バヴォン（Vyve-Saint-Bavon）で、フランドルでの短い休戦が、調印された[38)]。

この限られた短い時間内で、ヨリ具体的な交渉が、コルトレイ（Courtrai）と、トゥルネー（Tournai）で行われた。

また、その結果、1298年1月31日に、両王国の同盟が、最終的に1300年1月6日までに、トゥルネーで、調印されるという条文が作成され、フランドルでの休戦が、始まった[39)]。

フランドル伯領内での休戦が、実行されている間、エドワード１世は、スコットランド軍の侵攻が気になり、その結果、フランドル伯ギイ＝オヴ＝ダンピエールの同盟を破棄し、フィリップ４世端麗王と和解し、フランドルから1298年3月14日に、自国軍を引き揚げ、イングランドに戻った。

フランドル伯ギイ＝オヴ＝ダンピエールは、イングランドとの同盟解消、そしてフランドルからのイングランド軍の撤収により、フランドル諸都市の義勇兵と結束し、フランス軍と戦わざるを得なくなった。

エドワード１世が、1298年3月14日に、イングランドに戻った時に、エドワード王太子の摂政（Regent）が、終わった。

Ⅴ　王位継承

エドワード１世は、イングランドに戻るなり、早急に、1298年4月8日に、王室議会を開催させた。

その王室議会の内容は、1298年5月24日に、ヨークで、再度、王室議会を開催させ、その議会で、夏にスコットランドと戦うための召喚状を発送する

37）T. F. Tout, *The Political History of England*, Vol. 3, *ibid*, p. 211.
38）・T. F. Tout, *The Political History of England*, Vol. 3, *ibid*, p. 211.
・Maurice Powicke, *The Oxford History of England*, Vol.4, *op. cit.*, p. 668.
39）T. F. Tout, *The Political History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 211.

ことを、決定するということであった[40)]。

エドワード１世が緊急議会を開催させた背景には、1297年9月11日のスターリング＝ブリッジの戦い（Battle of Stirling Bridge）での敗北以降、スコットランド国境付近のイングランド人たちが、スコットランド人を非常に恐れていたからである。

その召喚状の具体的内容は、ランカスター（Lancashire）からの1,000人の歩兵と一緒に、12,600人のウェイルズ歩兵が、1298年6月17日、遅くとも6月25日まで、カーライル（Carlisle）に集結することを命じたものであった[41)]。

その結果、1298年7月22日、フォルカークの戦い（the Battle of Falkirk）となり、アーチェリー隊の優越さにより、エドワード１世軍の勝利で終わった。

というのは、ウィリアム＝ウォレス率いるスコットランド軍のショート＝ボウ（short bow：短弓）に対し、イングランド軍が、ロングボウ（longbow：長弓）の使用により、ヨリ遠くのスコットランド兵に打撃を与えたからである[42)]。

スコットランドでの危機的状態が、ひとまず落ち着いたところで、エドワード１世は、今度は、自身のアキテーヌ公領での和平を考え、封主フィリップ４世端麗王との休戦、友好を考えるようになった。

具体的には、イングランド王によるフランスとの政略結婚である。

すなわち、エドワード１世は、自身と、フィリップ４世端麗王の妹マーガレット＝オヴ＝フランス（Margaret of France, c. 1275-1318.2.14）との結婚、および自身の息子エドワード王太子と、フィリップ４世端麗王の王女イザベラ＝オヴ＝フランス（Isabella of France, c. 1295-1358.8.22）との結婚を考えた。

40）Fiona J. Watson, ***Under The Hammer***: Edward I and Scotland, 1286-1306, reprinted of 1998, edition, John Donald, an imprint of Birlinn Ltd, 2005, p. 61.

41）Fiona J. Watson, ***Under The Hammer, ibid.*** p. 61.

42）・Chris Brown, ***William Wallace***: The Man and the Myth, reprinted of 2006, edition, The History Press, 2014, p. 81.

・Ronald Nicholson, ***Scotland***, Vol.2, ***op. cit.***, p. 57.

この２つの事柄を含んだ規定が、1299年6月19日のモントルーユ条約（Treaty of Montreuil）である[43)]。

このモントルーユ条約により、フランドルがフランス領に、またガスコーニュがイングランド領に帰属するよう同意された。

そして、エドワード１世は、フィリップ４世端麗王の妹マーガレット＝オヴ＝フランスと、1299年9月9日、カンタベリー大司教ロバート＝ウィンチェルシー（Robert Winchelsea, c.1245-1313：在位1294-1313）のもと、カンタベリー大聖堂で再婚した[44)]。

さらに、エドワード１世は、イングランド王国の治安を、ヨリ安泰にするために、治安に直接影響がある隣接するウェイルズとの友好を考えた。

すなわち、エドワード１世は、ウェイルズのカナボーン城で生まれたエドワード王太子に、1301年、プリンス＝オヴ＝ウェイルズ（Prince of Wales）の称号を授けた[45)]。

エドワード１世が、この称号を、エドワード王太子に授けた背景には、当然、ウェイルズを侵攻、併合したことに対するウェイルズ人民の激怒を、次期イングランド王に就く人物がウェイルズで生まれた人物であるということで、少しでも抑えたいという気持ちからである[46)]。

なお、この時、エドワード王太子は、チェスター伯（Earl of Chester）も同時に、授与されている。

モントルーユ条約（1299年6月19日）により、フランドルがフランス領に帰属することになったことに対し、さらに不満を募らせたフランドル伯ギイ＝オヴ＝ダンピエールと、フランドル諸都市の反発義勇兵とが、ヨリ結束し、クルトレ（Courtrai）の地において、フランス軍に戦いを挑んだ。

すなわち、1302年7月11日、クルトレの戦い（Bataille de Courtrai：

43）T. F. Tout, *The Political History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 216.
44）T. F. Tout, *The Political History of England*, Vol. 3, *ibid*, p. 217.
45）T. F. Tout, *The Political History of England*, Vol. 3, *ibid.*, p. 220.
46）Cf. Cyril E. Robinson, *England*: A History of British Progress from the Early Ages to the Present Day, Thomas Y, Crowell Company, 1928, pp. 109-110.

Battle of Courtrai）が、勃発した。

結果は、ヨリ緊張感をもって臨んだフランドル伯ギイ＝オヴ＝ダンピエール軍の大勝利であった[47)]。

一方、フランドルから去って行ったイングランド軍は、スコットランドで、そこのリーダーである貴族のキャリック伯のロバート＝ザ＝ブルース（Robert the Bruce, Earl of Carrick, 1274.7.11-1329.6.7）を、1302年、支配下に置いていた。

というのは、フランドル・クルトレの戦いで、フランドル伯ギイ＝オヴ＝ダンピエール軍とフランドル諸都市の反発義勇兵とが活躍し、フランス軍を大敗北へと落とし入れたため、結果的に、スコットランドでのフランス援軍を撤収せざるを得なくなり、スコットランド軍が、孤立したからである[48)]。

その後、1303年5月20日のパリ条約（Treaty of Paris）により、1299年6月19日のモントルーユ条約で同意されていたガスコーニュが、イングランドに返還された[49)]。

イングランド王国内での治安が多少安定し、権力が増したエドワード１世は、エドワード王太子を同伴させ、1303年に再度、スコットランド侵攻を始めた[50)]。

その結果、1304年7月24日、スコットランド愛の強いウィリアム＝ウォレス（William Wallace, c. 1270-1305.8.23）を、スターリング城（Stirling Castle）から追い出し、スターリング城を、占領した[51)]。

なお、エドワード１世は、捕らえたウィリアム＝ウォレスを、1305年8月23日に絞首刑にし、四つ裂きにした[52)]。

47）・Maurice Powicke, *The Oxford History of England*, Vol.4, *op. cit.*, p. 653.
・J. R. Moreton Macdonald, *A History of France*, Vol. 1, *op. cit.*, p. 184.
・T. F. Tout, *The Political History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 221.

48）・Nicholas Hooper & Matthew Bennett, *Cambridge Illustrated Atlas*: Warfare, The・Middle Ages 768-1487, Cambridge University Press, 1996, p. 75.

49）T. F. Tout, *The Political History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 222.

50）T. F. Tout, *The Political History of England*, Vol. 3, *ibid*, p. 225.

51）T. F. Tout, *The Political History of England*, Vol. 3, *ibid*, p. 225.

エドワード１世は、スターリング城を占領することによって、スコットランド侵攻の足場を固めることができた。

エドワード１世治世の重鎮、リッチフィールド司教（Bishop of Lichfield）、王室財務担当であるウォルター＝ラングトン（Walter Langton, 1243.9.2-1321.11.9）とエドワード王太子とが、1306年、ばかばかしい喧嘩になった。この時、ピエール＝ドゥ＝ギャヴスタンは、異常なまでも、エドワード王太子側に付き、宮廷内で扶養された恩義も忘れ、エドワード１世と衝突するようになった[53)]。

スコットランド侵攻を優位に進めていたエドワード１世は、反抗的なピエール＝ドゥ＝ギャヴスタンの態度や、またエドワード王太子とピエール＝ドゥ＝ギャヴスタンとの男同士の不適切な関係を苦慮し、戦時の中、彼の国外追放を決定し、1307年2月26日、ピエール＝ドゥ＝ギャヴスタンを、イングランド王国外に追放に処した[54)]。

このイングランドからの追放は、ピエール＝ドゥ＝ギャヴスタンにとって、第１回目の亡命であった。

ウィリアム＝ウォレスの死後、スコットランドで勢力を増したのは、キャリック伯のロバート＝ザ＝ブルース（Robert the Bruce, Earl of Carrick, 1274.7.11-1329.6.7）である。

そして、キャリック伯のロバート＝ザ＝ブルースは、スコットランドをまとめ、1306年に、スコットランド王ロバート１世（Robert Ⅰ：在位1306-1329）になった。

スコットランド王ロバート１世は、1307年5月10日、スコットランド軍

52）・Maurice Powicke, *The Oxford History of England*, Vol.4, *op. cit.*, p. 712.
・A. F. Murison, *William Wallace*: Guardian of Scotland, reprinted of 1889, edition, Dover Publication, Inc., 2003, pp. 145-146.
53）T. F. Tout, *The Political History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 232.
54）・T. F. Tout, *The Political History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 236.
・Maurice Powicke, *The Oxford History of England*, Vol.4, *op. cit.*, p. 719.
・Robert Lacey, *Great Tales from English History*, reprinted of 2003, edition, Abacus, 2014, p. 116.

を率いて、エアシャー（Ayrshire）近郊のラウドン＝ヒル（Loudoun Hill：Loudun Hill：Loudon Hill）で、イングランド軍と戦いに臨んだ。

結果は、軍の指揮命令系統が整っていたスコットランド軍の勝ちで、イングランド軍の敗北であった[55)]。

このイングランド軍の敗北に対し、エドワード１世は、意を貫徹にするため、再度、エドワード王太子を同伴させ、スコットランド遠征に出向いた。だが、エドワード１世は、カーライルを過ぎ、ソルウェー湾（Solway Firth）近くのバーク＝バイ＝サンズ（Burgh-by-Sands）のカンバーランド村（Cumberland village）で、赤痢（dysentery）に掛かり、1307年7月7日、崩御した[56)]。

エドワード１世の崩御により、エドワード王太子が、1307年7月8日にイングランド王位を継承し、1308年2月24日、ウェストミンスター＝アベイ（Westminster Abbey）で、戴冠式を行い、公的に、エドワード２世になった[57)]。

Ⅵ　オーディナンセズ（Ordinances：行政改革勅令 1311.8）

イングランド王位を継承したエドワード２世は、直近の課題であるスコットランド遠征の意義を、顧みなかった。

というには、エドワード２世が、父エドワード１世、さらにはウィリアム征服王（William I, the Conqueror, c. 1027-1087.9.9）が目指していた、グレート＝ブリテン（Great Britain）島の完全な支配、統一を無視して、遠征の途中、ロンドンに帰ったからである。

55）Ronald McNair Scott, *Robert the Bruce*: King of Scots, Reprinted of 1982, edition, Canongate Books Ltd, 2014, p. 102.

56）・Allen Andrews, *Kings & Queens of England & Scotland*, reprinted of 1976, edition, Marshall Cabendish Books, 1994, p. 52.

・May McKisack, The Fourteenth Century 1307-1399, in George Clark, edition, *The Oxford History of England*, Vol.5, reprinted of 1959, edition, Oxford University Press, 1992, p.1.

57）Plantagenet Somerset Fry, *The King & Queens of England & Scotland*, reprinted of 1999, edition, A Dorling Kindersley Limited, 2011, p. 29.

エドワード２世は、1307年7月7日の父エドワード１世の崩御に対し、喪に服することなく、すぐにピエール＝ドゥ＝ギャヴスタンを、フランスからイングランドに呼び戻した。

そして、エドワード２世は、1307年8月6日、ピエール＝ドゥ＝ギャヴスタンに、多くの土地、荘園、城、町区、村落を、コーンウォール伯爵（Earl of Cornwall）を授与した[58)]。

さらに、エドワード２世は、コーンウォール伯ピエール＝ドゥ＝ギャヴスタンの結婚を準備し、1307年10月、自身の姪であり、第７代グロスター伯ギルバート＝ドゥ＝クレア（Gilbert de Clare, 7th Earl of Gloucester, 1243-1295）の娘マーガレット＝ドゥ＝クレア（Margaret de Clare, 1293-1342.4）と結婚させた[59)]。

なお、ピエール＝ドゥ＝ギャヴスタンがイングランドに帰ってきたときは、エドワード２世は、フィリップ４世端麗王の王女イザベラ＝オヴ＝フランスと結婚式を挙げるため、フランスのブーローニュ（Boulogne）に行き、居なかった[60)]。

これらのエドワード２世の一連の行為は、父エドワード１世に対する裏切り行為であり、また、有力な貴族、裁判所、教会からは、不満が発せられた。

エドワード１世は、母エリナ＝オヴ＝カスティルが亡くなった以降も、女系の環境の中で生活することになったエドワード王太子に対し、少しでも男らしく育ってもらうために、騎士道精神を学びながら育ってほしいと考えた。

そのため、エドワード１世は、ガスコーニュのナイト、しかも自身の危険に対しては、体を張ってくれた忠誠心の熱いサー＝アーノルド＝ドゥ＝ギャヴスタンを、彼の息子ピエール＝ドゥ＝ギャヴスタンと共に、宮廷に招き入れた。

そして、エドワード１世は、ピエール＝ドゥ＝ギャヴスタンが、ちょうど

58）・T. F. Tout, *The Political History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 238.
・May McKisack, *The Oxford History of England*, Vol.5, *op. cit.*, pp. 2-3.
59）May McKisack, *The Oxford History of England*, Vol.5, *op. cit.*, p. 3.
60）Robert Lacey, *Great Tales from English History*, *op. cit.*, p. 116.

自身のエドワード王太子と同じくらいの年齢で、エドワード王太子の遊び友達になってくれて、その遊びの中から、エドワード王太子に、模範的な騎士道精神を植え付けて貰いたい、と考えていたであろう。

対戦争のため、王宮を留守にすることが多かったエドワード１世は、エドワード王太子に、特に、ナイトの行動規範である正直さ、高潔さ、礼儀正しさ、崇高な行いを、学ばせたかったであろう。

王宮内でのサー＝アーノルド＝ドゥ＝ギャヴスタンとピエール＝ドゥ＝ギャヴスタンとの評判は、芳しくなかった。

王宮内では、ガスコーニュのナイト・サー＝アーノルド＝ドゥ＝ギャヴスタンは、エドワード１世のフランスでの下臣であり、イングランドでの下臣ではない、と噂されていた。

また、息子のピエール＝ドゥ＝ギャヴスタンは、フランス・ガスコーニュ生まれで、イングランドでは受け入れられないような装いをしていた。

ピエール＝ドゥ＝ギャヴスタンは、エドワード１世から追放され、そしてエドワード２世からイングランドに呼び戻され、コーンウォール伯を授かった時から、貪欲傲慢な態度が現れるようになった。

ピエール＝ドゥ＝ギャヴスタンにコーンウォール伯位を授与したことに対する批判のなかエドワード２世は、1299年6月19日のモントルーユ条約を履行するため、フランスのブーローニュ（Boulogne）に行き、1308年1月25日フィリップ４世端麗王の王女イザベラ＝オヴ＝フランス結婚式を挙げた[61)]。

また、結婚のためイングランドを留守にする間、エドワード２世は、コーンウォール伯ピエール＝ドゥ＝ギャヴスタンを、最強の地位である摂政（Regent）にしていた[62)]。

エドワード２世が、コーンウォール伯ピエール＝ドゥ＝ギャヴスタンを、摂政に任命したことや、また、彼ら２人の不適切な関係が、新婚当初から、花嫁イザベラ＝オヴ＝フランスを、無視し続け、嫌がらせしていたことに対

61）・T. F. Tout, *The Political History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 239.
・May McKisack, *The Oxford History of England*, Vol.5, *op. cit.*, p. 4.
62）T. F. Tout, *The Political History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 239.

し、反ピエール＝ドゥ＝ギャヴスタン、言い換えると、イングランド王国にとって、良識ある貴族たち、上院議員たちは、憤激した[63)]。

また、結婚式に出席し、花嫁をイングランドの新居までエスコートしたイザベラ＝オヴ＝フランスの叔父は、エドワード２世とピエール＝ドゥ＝ギャヴスタンとの男同士の不適切な関係を目の当たりにし、嫌気を差し、イングランドを後にした[64)]。

この時点で、イザベラ＝オヴ＝フランスの叔父は、エドワード２世が、イングランド王として、不適格と確信した。

また、良識ある貴族、議員たちも、エドワード２世のイングランド王としての無能さを、確信した。

その１か月後、ロンドンに戻ったエドワード２世は、1308年2月25日に、ウェストミンスター＝アベイ（Westminster Abbey）で、戴冠式を挙げた[65)]。

その戴冠式の時、貪欲傲慢なコーンウォール伯ピエール＝ドゥ＝ギャヴスタンが、エドワード証誓王の王冠と剣とを、カンタベリー大司教ロバート＝ウィンチェルシー（Robert Winchelsea, Archbishop of Canterbury, c. 1245-1313：在位1293.2.23-1313.5.11）のもとまで運ぶという、重要ポジションに就いていた[66)]。

このコーンウォール伯ピエール＝ドゥ＝ギャヴスタンの最重要ポジションは、当然、エドワード２世が、任命したのである。

このことにより、コーンウォール伯ピエール＝ドゥ＝ギャヴスタンは、ヨリ権力を拡大させ、宮廷内外で、貪欲傲慢で傍若無人な態度をとるようになり、目に余るようになってきた。

多くの良識ある有力な貴族、バロンたちは、最早、この貪欲傲慢で傍若無人なコーンウォール伯ピエール＝ドゥ＝ギャヴスタンの行動を、無視できな

63）T. F. Tout, *The Political History of England*, Vol. 3, *ibid*, p. 240.
64）T. F. Tout, *The Political History of England*, Vol. 3, *ibid*, p. 240.
65）T. F. Tout, T*he Political History of England*, Vol. 3, *ibid*, p. 239.
66）・Robert Lacey, *Great Tales from English History, op. cit.*, p. 115.
・May McKisack, *The Oxford History of England*, Vol.5, *op. cit.*, p. 4.

くなってきた。

彼らバロンたちは、王妃イザベラ＝オヴ＝フランスの支持者へとなっていった。

その結果、1308年4月に、貴族議会が開催された。

その貴族議会は、いくつかの改革案の要求をエドワード２世に提出したが、否決された。そして、貴族議会は、エドワード２世とピエール＝ドゥ＝ギャヴスタンとの親密な関係、男同士の不適切な関係が、新妻イザベラ＝オヴ＝フランスに悲惨さをもたらし、また議会にとっても不幸を招いているとし、ピエール＝ドゥ＝ギャヴスタンの爵位を剥奪し、ピエール＝ドゥ＝ギャヴスタンを、国外追放に処すると宣言した[67)]。

この悪夢のような情報を得た王妃イザベラ＝オヴ＝フランスの父フィリップ４世端麗王は、エドワード２世に対し、憂慮の念を伝えた。

その結果、1308年5月18日、エドワード２世による開封勅許状（letters patent）が、発令された。

その内容は、1308年6月25日までに、コーンウォール伯ピエール＝ドゥ＝ギャヴスタンが国外に追放されるべきことを、約束したものであった[68)]。

実際に、ピエール＝ドゥ＝ギャヴスタンは、1308年6月25日、アイルランド副総督というタイトルを授与され、アイルランドへ追放された。

このイングランドからの追放は、ピエール＝ドゥ＝ギャヴスタンにとって、第２回目の亡命であった。

だが、この追放も、1309年7月のスタンフォード議会により容赦され、ピエール＝ドゥ＝ギャヴスタンは、アイルランドからイングランドに帰国した[69)]。

というのは、議会が1309年4月に提出した改革案の要求を、エドワード２世が承諾したからである。

そして、エドワード２世は、自身の有力な支持者、諸侯たちを、味方につ

67）T. F. Tout, *The Political History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 241.
68）T. F. Tout, *The Political History of England*, Vol. 3, *ibid*, p. 241.
69）・T. F. Tout, *The Political History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 242.
・May McKisack, *The Oxford History of England*, Vol.5, *op. cit.*, pp. 8-9.

け、帰国したばかりのピエール＝ドゥ＝ギャヴスタンに、再度、コーンウォールの伯位を授与した。

このことに対し、バロンたちは、反発激怒し、1310年初期、再度、エドワード２世とピエール＝ドゥ＝ギャヴスタンの２人を、攻撃する準備を始めた[70)]。

そして、1310年3月、ロンドンで開催された有力なバロンたちの議会において、この激怒が、再度、爆発した[71)]。

この有力なバロンたちは、武装し、エドワード２世に対し、廃位を求めた。

そのバロンたちの爆発は、1310年3月16日、議会において、廃位という脅しを受けたエドワード２世同意のもと、諸侯の互選により、選ばれた21名の諸侯による行政改革委員会を創設することになった。

すなわち、その選ばれた21名の諸侯は、議会において、ローズ＝オーディナーズ（Lords Ordainers：行政改革勅令起草諸侯委員会）のメンバーとして、指名されたのである[72)]。

このローズ＝オーディナーズのリーダーは、第２代ランカスター伯トーマス（Thomas, 2nd Earl of Lancaster, c.1278-1322.3.22）である。

ローズ＝オーディナーズが、国王と宮廷との改革案を検討している間、言い換えると、イングランド王宮内で対立が生じている間、その対立に乗じて、スコットランド王ロバート１世は、イングランド北部を攻撃し出した。

これに対して、エドワード２世は、第３代リンカーン伯ヘンリー＝ドゥ＝レイシー（Henry de Lacy, 3rd Earl of Lincoln, c. 1251-1311.2）を、摂政（Regent）として、あまり軍事的準備をせずに、ロンドンから北へ向かった。

言い換えると、エドワード２世は、廃位をちらつかされているローズ＝オーディナーズから、一刻も早く逃げたいという気持ちから、スコットランドに向かったのである。

70）T. F. Tout, *The Political History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 243.
71）T. F. Tout, *The Political History of England*, Vol. 3, *ibid*, p. 243.
72）・T. F. Tout, *The Political History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 244.
・May McKisack, *The Oxford History of England*, Vol.5, *op. cit.*, p. 10.

結果的に、エドワード２世は、1310年9月に、スコットランド軍と衝突したが、成果が上げられなかった[73)]。

スコットランドとの戦闘中、1311年2月に、摂政の第３代リンカーン伯ヘンリー＝ドゥ＝レイシーが、亡くなってしまった。

この摂政の第３代リンカーン伯ヘンリー＝ドゥ＝レイシーの後を引き継いだのは、自身の娘で、女子相続人である第４代リンカーン伯アリス＝ドゥ＝リンカーン（Alice de Lacy, 4th Countess of Lincoln, 1281.12.25-1348.10.2）と結婚した第２代ランカスター伯トーマス（Thomas, 2nd Earl of Lancaster, c.1278-1322.3.22）であった[74)]。

この結婚によって、ウェイルズ辺境伯の１人だった第２代ランカスター伯トーマスは、ランカスター、レスター、ダービー、リンカーン、ソールズベリーの５つの伯爵（アールダム：Earldom）の爵位を、獲得したことになった[75)]。

このことは、イングランド王エドワード２世の領地よりも大きく、エドワード２世に次ぐ、権力を持ったということを意味している。

なお、この第２代ランカスター伯トーマスは、ヘンリー３世（Henry III, 120710.1-1272.11.16：在位1216.10.28-1272.11.16）の孫であり、コーンウォールの伯ピエール＝ドゥ＝ギャヴスタンの国外追放を強く望んでいた21名の諸侯から成る行政改革勅令起草諸侯委員会ローズ＝オーディナーズの１員であった。

言い換えると、このリンカーン伯･第２代ランカスター伯トーマスは、コーンウォールの伯ピエール＝ドゥ＝ギャヴスタンに対し、憎悪の念を燃やしていた、ということが言える。

第２代ランカスター伯トーマスは、結婚によって得た新伯領リンカーン、ソールズベリーのため、封主イングランド王エドワード２世に対し、下臣としてのオマージュ（homage：臣従の礼）を執らなければならなかった。

73）T. F. Tout, *The Political History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 245.
74）T. F. Tout, *The Political History of England*, Vol. 3, *ibid*, p. 245.
75）T. F. Tout, *The Political History of England*, Vol. 3, *ibid*, pp. 245-246.

すなわち、エドワード２世が、国境を越え、スコットランドで戦っているため、その戦場ベリック（Berwick）に、第２代ランカスター伯トーマスが、自ら出向いて、オマージュを執らなければならなかった。

だが、第２代ランカスター伯トーマスは、自らの巨大な権力を楯にして、イングランド王国外でのオマージュを、拒否した[76)]。

結果的に、ベリックにいたエドワード２世が折れ、ベリックの南東４マイルのハガーストン（Haggerston）で、２人が会った。

その会った場所で、第２代ランカスター伯トーマスは、エドワード２世に対し、形式的なオマージュを執り、お互いに挨拶を交わした。

だが、第２代ランカスター伯トーマスは、エドワード２世の傍らにいた、成り上がり者のコーンウォールの伯ピエール＝ドゥ＝ギャヴスタンに対しは、敬礼の挨拶をしなかった[77)]。

この慇懃無礼な第２代ランカスター伯トーマスの振舞いに対し、かなり憤激し、その場を去り、ベリックに戻った。そのベリックに、エドワード２世は、改革案が作成されるまで滞在した。

エドワード２世は、21 人の諸侯から成る行政改革勅令起草諸侯委員会ローズ＝オーディナーズによる改革案が作成されたため、ロンドン議会から、召集を受け、1311年7月末、スコットランド国境付近での戦争を止め、1か月後、ロンドンに戻った。

なお、エドワード２世は、 21 人の諸侯から成るローズ＝オーディナーズから、コーンウォールの伯ピエール＝ドゥ＝ギャヴスタンの命を守るために、彼を、堅牢な壁で守られているバンバラ城（Bamburgh Castle）に残した[78)]。

ロンドン議会が、1311年8月に開催され、行政改革勅令起草諸侯委員会ローズ＝オーディナーズは、自身たちが作成した 35 以上の条項から成る王国、

76）T. F. Tout, *The Political History of England*, Vol. 3, *ibid*, p. 247.
77）T. F. Tout, *The Political History of England*, Vol. 3, *ibid*, p. 247.
78）T. F. Tout, *The Political History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 247.
・May McKisack, *The Oxford History of England*, Vol.5, *op. cit.*, p. 12.

宮廷改革案、オーディナンセズ（Ordinances：行政改革勅令）を、ロンドン議会に提出した[79)]。

この1311年8月の行政改革勅令オーディナンセズは、41条に編纂され[80)]、計り知れないプレッシャーが掛かっているエドワード２世に、1311年10月5日、認めさせた[81)]。

Ⅶ　廃　位（Deposition, 1327.1.24）

行政改革勅令起草諸侯委員会ローズ＝オーディナーズが、エドワード２世に認めさせた行政改革勅令オーディナンセズは、当然、ピエール＝ドゥ＝ギャヴスタンの永久国外追放とエドワード２世の権力規制とであった[82)]。

パーラメント（Parliament）から、エドワード２世の管理、監督、およびピエール＝ドゥ＝ギャヴスタンの国外永久追放の許可を得たローズ＝オーディナーズは、実行に移った。

行政改革勅令オーディナンセズにより、生命の危機感を感じたピエール＝ドゥ＝ギャヴスタンは、1311年11月初旬に、フランダースに亡命した。だが、ピエール＝ドゥ＝ギャヴスタンは、その１か月後の1311年12月のクリスマスまでに、イングランドに戻った[83)]。

なお、ピエール＝ドゥ＝ギャヴスタンが、1311年11月初旬に、フランダースに亡命したのは、彼にとって第３回目の亡命であった。

イングランドに戻ったピエール＝ドゥ＝ギャヴスタンは、エドワード２世所有のウィンザー城（Windsor Castle）等の王の城に逃げ隠れているという噂が広まった。

そして、1312年初旬、ピエール＝ドゥ＝ギャヴスタンは、公然と、エドワー

79）T. F. Tout, *The Political History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 247.
80）David C. Douglas, by General Editor, *English Historical Documents*, Vol. 3, *op. cit.*, pp. 527-539.
81）David C. Douglas, by General Editor, *English Historical Documents*, Vol. 3, *ibid.*, p. 539.
82）David C. Douglas, by General *Editor, English Historical Documents*, Vol. 3, *ibid.*, pp. 527-539.
83）T. F. Tout, *The Political History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 249.

ド２世と一緒に、ヨークに行き、1312年1月18日、エドワード２世から、不法な国外追放から、イングランドに帰ったと宣言され、その２～３週間後、再度、爵位と領地を授与された[84)]。

身の危険を感じていたエドワード２世とピエール＝ドゥ＝ギャヴスタンは、避難場所をスコットランドに求め、スコットランド王ロバート１世と密約を交わした[85)]。

これに対して、スコットランド王ロバート１世は、イングランド王は信頼できないとして、密約を拒否した。

ローズ＝オーディナーズは、このピエール＝ドゥ＝ギャヴスタンの帰国を、自分たちに対する宣戦布告とみなした。

また、カンタベリー大司教ロバート＝ウィンチェルシーは、エドワード２世とピエール＝ドゥ＝ギャヴスタンの破門を宣し、行政改革勅令起草諸侯委員会ローズ＝オーディナーズに残っていた８人の内、５人に対し、ローズ＝オーディナーズの精神と組織を維持すること、ピエール＝ドゥ＝ギャヴスタンを追い詰め殺害することを、誓約させた[86)]。

そのローズ＝オーディナーズの５人とは、第２代ランカスター伯トーマス、第２代ペンブルックシア伯エイマー＝ドゥ＝バランス（Aymer de valence, 2nd Earl of Pembroke, c. 1275-1324.6.23）、第４代ヘレフォード伯ハンフリー＝ドゥ＝ブーン（Humphrey de Bohun, 4th Earl of HerefordBohun.1276-1322.3.16）、第９代アランデル伯エドモンド＝フィッツアラン（Edmund FitzAlan, 9th Earl of Arundel, 1285.5.1-1326.11.17）、第10代ワーウィック伯ギイ＝ドゥ＝ボーシャン（Guy de Beauchamp, 10th Earl of Warwidk, c. 1272-1315.8.12）である。

ローズ＝オーディナーズの内、穏健派の第２代ペンブルックシア伯エイマー＝ドゥ＝バランスを除いて、残りの４人が、ピエール＝ドゥ＝ギャヴスタンとエドワード２世を、北へ追い詰めた。

84）T. F. Tout, *The Political History of England*, Vol. 3, *ibid*, p. 249.
85）T. F. Tout, *The Political History of England*, Vol. 3, *ibid*, p. 249.
86）T. F. Tout, *The Political History of England*, Vol. 3, *ibid*, p. 249.

そして、4人のローズ＝オーディナーズは、1312年5月4日、ピエール＝ドゥ＝ギャヴスタンを、スカーバラ城（Scarborough Castle）に追い詰めた。またエドワード2世は、ヨークに逃げた。

スカーバラ城で捕らえられたピエール＝ドゥ＝ギャヴスタンは、1312年6月19日、第2代ランカスター伯トーマスの家来・2人のウェイルズ人によって、ブラックロウ＝ヒル（Blacklow Hill）殺害された[87)]。

なお、エドワード2世は、殺害されたピエール＝ドゥ＝ギャヴスタンの遺体を、殺害したローズ＝オーディナーズに対する復讐のため、特にエドワード2世自身の従兄弟にあたる第2代ランカスター伯トーマスに復讐するため、防腐処理を施した。

だが、現時点でのローズ＝オーディナーズの権力に逆らえず、復讐の意を果たさないまま、エドワード2世は、1314年12月、ピエール＝ドゥ＝ギャヴスタンの遺体を、ハートフォードシャー（Hertfordshire）、キングスラングリー（King's Langley）のドミニカ修道院に埋葬した[88)]。

国王と宮廷との改革を行っている間、スコットランド王ロバート1世は、しだいに勢力を増し、イングランド北部を南下してきた。

これに対し、エドワード2世は、ピエール＝ドゥ＝ギャヴスタンの死後、多くの貴族が、自身の支持側についてくれたのを切っ掛けに、対スコットランド遠征のために戦費を、パーラメントに求めた。

結果は、パーラメントから、補助金を得ることができた。

だが、エドワード2世は、1314年6月24日のバノックバーン闘争（the Battle of Bannockburn）で、自身の采配ミス、司令官としての能力欠如、巨大な軍事力を保有している第2代ランカスター伯トーマスの不参加により、スコットランドに大敗を喫してしまった。

逆にいうと、ロバート1世は、スコットランド諸侯を一致団結させ、バノックバーンでの地誌を熟知し、沼地でのゲリラ戦に持ち込んだから、大勝利を

87）・T. F. Tout, *The Political History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 251.
・Robert Lacey, *Great Tales from English History*, *op. cit.*, p. 118.
88）May McKisack, *The Oxford History of England*, Vol.5, *op. cit.*, p. 47.

得たのである。

大敗を喫したイングランドにおいては、ローズ＝オーディナーズの１員であり、エドワード２世自身の従兄弟にあり、強力な反エドワード２世である第２代ランカスター伯トーマスが、宮廷の公職につき、権力を増してきた。また、第10代ワーウィック伯ギイ＝ドゥ＝ボーシャンも次第に、勢力を増してきた。

この大敗により、イングランド宮廷内では、エドワード２世支持派の諸侯と、王妃イザベラ＝オヴ＝フランスの支持者派の諸侯との対立が激化し始めた。

逆に、スコットランドでは、このバノックバーン闘争の大勝により、独立が確実になった。

また、この勝利により、スコットランド王ロバート１世は、イングランドから認められたスコットランド王になった。

バノックバーン闘争に大勝利したロバート１世は、次に、イングランドの勢力下にあり、敗戦した多くのイングランド諸侯が逃げ込んだアイルランドに侵攻していった。

具体的には、スコットランド王ロバート１世が、自身の弟エドワード＝ブルース（Edward Bruce, Earl of Carrick, High King of Ireland, c. 1280-1318.10.14）を、1316年５月２日、アイルランド王（High King of All Ireland）に任命し[89)]、アイルランド侵攻を行わせたのである。

なお、エドワード２世は、このエドワード＝ブルースのアイルランド王を、公的に認めていないので、イングランド側から見ると、アイルランド僭称王エドワード＝ブルースということになる。

これに対抗するため、エドワード２世は、王党派であるウィグモア男爵ロジャー＝モーティマー（Roger Mortimer, Baron of Wigmore：その後の第

89）・Ronald McNair Scott, ***Robert The Bruce・King of Scots***, reprinted of 1982, edition, Canongate: Edinburgh・London, 1988, p. 174.
・Edward J. Cowan, ‘***For Freedom Alone***’ : The Declaration of Arbroath, 1320, reprinted of 2003, edition, Birlinn: Edinburgh, 2008, p. 33.

１代ウェイルズ辺境伯ロジャー＝モーティマー（Roger Mortimer, 1st Earl of March, 1287.4.25-1330.11.29）を、1316年11月、アイルランド総督（Lord Lieutenant of Ireland）に任命し[90)]、1317年アイルランドに送った。

その結果、アイルランド総督・第１代辺境伯ロジャー＝モーティマーは、1317年ダンドーク（Dundalk）で、イングランドとは敵対関係にあるアイルランド僭称王エドワード＝ブルースと、衝突した。

その衝突の結果、1318年10月14日、ダンドークでのファグハート闘争（the Battle of Faughart）となり、ジョン＝ドゥ＝バーミンガム（John de Bermingham）率いるアングロ＝アイリッシュ（Anglo-Irish）軍が、エドワード＝ブルースを殺害した[91)]。

このエドワード＝ブルースが亡くなったということは、アイルランド最後のハイ＝キング（the last High King of Ireland）が亡くなったということを意味していた。

アイルランドでの治安が回復したことにより、任務を終えた第１代ウェイルズ辺境伯ロジャー＝モーティマーは、1318年、イングランドに戻った。

イングランドでは、エドワード２世が、ピエール＝ドゥ＝ギャヴスタンでの失敗を反省せず、1318年頃から、台頭してきたウェイルズ辺境伯の１人であるウィンチェスター伯ヒュー＝デスペンサー（Hugh le Despenser,：The Elder Despenser, 1st Earl of Winchester, 1261.3.1-1326.10.27）と、同名の彼の息子第１代デスペンサー卿ヒュー＝デスペンサー（Hugh le Despenser：The Younger Despenser, 1st Lord Despenser, c. 1286-1326.11.24）との父子を重用していた[92)]。

なお、王妃イザベラ＝オヴ＝フランスは、ピエール＝ドゥ＝ギャヴスタンを嫌ったように、この台頭してきたデスペンサー父子（the Despensers）も嫌っていた。

90）Ronald McNair Scott, *Robert The Bruce・King of Scots*, *ibid*, p.174.
91）・T. F. Tout, *The Political History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 272.
・May McKisack, *The Oxford History of England*, Vol.5, *op. cit.*, p. 44.
92）T. F. Tout, *The Political History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 277.

エドワード２世は、公職に、デスペンサー父子を就任させたことにより、バノックバーン闘争に不参加であり、自身に対し、強力な反対派である第２代ランカスター伯トーマスを、公職から外した。

この時から、同じウェイルズ辺境伯の１人である第２代ランカスター伯トーマスは、デスペンサー父子を、妬むようになっていった。

重用を受けていたデスペンサー父子は、エドワード２世の権威を後ろ盾にし、自身の出身地であるウェイルズ辺境地域での、強引な領土拡大を行っていた。

領土を縮小されたウェイルズ辺境伯領たちは、当然、デスペンサー父子、延いては、エドワード２世に対し、敵愾心を燃やすようになっていった。

デスペンサー父子への重用は、エドワード２世への国政に、かなりの影響を与えていた。

言い換えると、デスペンサー父子が、国政に口出ししていることに対し、行革しようとしている諸侯から、しだいに不満、不評を買っていた。

ピエール＝ドゥ＝ギャヴスタンの時の失敗と同じように、重用している１人、あるいは２人からの意見、行動により、イングランド王国の国政が、左右されているので、エドワード２世は、全く学習能力がない人物と評せられる。

イングランドに戻っていたウィグモア男爵ロジャー＝モーティマーは、この状況がイングランド王国にとって、良くないと判断し、反デスペンサー父子側の行革推進諸侯側についた[93)]。

言い換えると、この時点から、ウィグモア男爵ロジャー＝モーティマーは、反王党派になっていったのである。

その結果、1321年2月、デスペンサー父子をかばうエドワード２世と、ウィグモア男爵ロジャー＝モーティマーが支持した行革諸侯たちの同盟との間に、内戦が勃発した[94)]。

ウィグモア男爵ロジャー＝モーティマーと行革推進諸侯同盟は、反エド

93）May McKisack, *The Oxford History of England*, Vol.5, *op. cit.*, p. 61.
94）T. F. Tout, *The Political History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, pp. 280-281.

ワード２世の旗頭である第２代ランカスター伯トーマスと協力し、ウェイルズで強引な領土拡大をしているデスペンサー父子の追放を、エドワード２世に強く迫った。

この時点では、デスペンサー父子の追放をという１つの目的であったので、ウィグモア男爵ロジャー＝モーティマーと第２代ランカスター伯トーマスとが、お互いに協力できた。

でも、第２代ランカスター伯トーマスにとっては、ウィグモア男爵ロジャー＝モーティマーが、エドワード２世から指名されたアイルランド総督であったり、元王党派であったりしていたので、本心から、信用していなかった。

その結果、エドワード２世は、反王党派の勢いに押され、デスペンサー父子の国外追放を承諾し、デスペンサー父子は、1321年8月、亡命を余儀なくさせられた[95)]。

封主のエドワード２世は、自身の下臣であるウィグモア男爵ロジャー＝モーティマーと、反体制派の諸侯の行動が、封建的契約違反と判断し、1321年、召喚命令を下した。

だが、ウィグモア男爵ロジャー＝モーティマーと叔父のチェック男爵ロジャー＝モーティマー（Roger Mortimer, Baron of Chirk, c. 1260-1326.8.3）、および反体制派の諸侯は、この1321年、召喚命令を、拒否した[96)]。

デスペンサー父子を嫌っていた王妃イザベラ＝オヴ＝フランスは、彼らが国外追放になり、やっと宮廷内で、平穏な暮らしができるようになった。

この平穏の中、王妃イザベラ＝オヴ＝フランスは、巡礼のためカンタベリーに向かった。その途次、1321年10月13日、休息のため、第１代バドレメア男爵バーソロミュー＝ドゥ＝バドレメア（Bartholomew de Badlesmere, 1st Baron Badlesmere, c.1275-1322.4.14）所有のリーズ城（Lees Castle）に寄った。

そのリーズ城で、良きおもてなしがあると、王妃イザベラ＝オヴ＝フラン

95）・Michael Prestwich, *The Three Edwards, op. cit.*, p. 80.
・T. F. Tout, *The Political History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, pp. 280-281.
・May McKisack, *The Oxford History of England*, Vol.5, *op. cit.*, p. 64.
96）Cf. May McKisack, *The Oxford History of England*, Vol.5, *ibid*, p. 61.

スは、期待していた。

だが、良きおもてなしどころか、バドレメア男爵夫人マーガレット＝ドゥ＝クレア（Margaret de Clare, Baroness Badlesmere, c. 1287.4.1-1333.10.22）から、リーズ城の入場を拒否され、アーチェリー隊の襲撃を受け、付き人６人が、殺害されてしまった[97]。

というのは、リーズ城の所有者・第１代バドレメア男爵バーソロミュー＝ドゥ＝バドレメアは、1321年３月16日のバーロウブリッジの闘争で戦っていたものの、ランカスター伯トーマスとは、非常に敵対関係であったし、エドワード２世には、非常に嫌っていた、という行動をとっていたからである。

この夫の第１代バドレメア男爵バーソロミュー＝ドゥ＝バドレメアの行動を、夫人のマーガレット＝ドゥ＝クレアは、認識していた。

身の危険を感じた王妃イザベラ＝オヴ＝フランスは、リベンジのため、夫のエドワード２世に、助けを求めた。

助けを求められたエドワード２世は、多数の軍隊を伴い、1321年10月23日に、リーズ城を包囲した。

その結果、1321年10月31日、圧倒的な軍事力を有するエドワード２世軍は、力尽くで、リーズ城を掌握し、リンカーン司教バーソロミュー＝ドゥ＝ブルグハーシ（Bartholomew de Burghersh, Bishop of Lincoln, d. 1355.8.3）を、ロンドン塔に投獄し、バドレメア男爵夫人マーガレット＝ドゥ＝クレアを、ドーヴァー城（Dover castle）に投獄した[98]。

リーズ城が包囲された時、この城の所有者であり、反王党派でもある第１代バドレメア男爵バーソロミュー＝ドゥ＝バドレメアが、エドワード２世に対して、何も行動を起こさなかったことに対し、反王党派の旗頭である第２代ランカスター伯トーマスは、彼と距離を置くようになった。

このような反王党派での亀裂が生じた中、エドワード２世は、リーズ城陥落以降、しだいに、自身の野望を拡大させ北へ向かった。

97）T. F. Tout, *The Political History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 283.
98）T. F. Tout, *The Political History of England*, Vol. 3, *ibid*, p. 283.

まず初めに、エドワード２世は、自身を裏切った反王党派のリーダーであるウィグモア男爵ロジャー＝モーティマーを、1321年の召喚命令拒否に対し、1322年1月に捕らえ、ロンドン塔に投獄し、そしてデスペンサー父子を、1322年2月11日、イングランドに呼び戻した[99)]。

反エドワード２世派の旗頭である第２代ランカスター伯トーマスは、同じ反王党派であるが、本心から信用していなかったウィグモア男爵ロジャー＝モーティマーに対し、援軍を送らなかった。

そして、エドワード２世率いる王党軍と第２代ランカスター伯トーマス率いる反王党軍が、1322年3月16日、ヨークの北西部で衝突し、バーロウブリッジの闘争（the Battle of Boroughbridgh）となった。

このバーロウブリッジの闘争において、軍事的に圧倒的有利な王党派に対し、反王党軍の戦術ミスと、リーダーの第４代ヘレフォード伯ハンフリー＝ドゥ＝ブーン（Humphrey de Bohun, 4th Earl of HerefordBohun.1276-1322.3.16）の最初の戦死によって、指揮命令系統が崩れ、1322年3月22日、第２代ランカスター伯トーマスが、王党派に殺害された[100)]。

ロンドン塔に投獄されていた反王党派のウィグモア男爵ロジャー＝モーティマーは、監視員の隙を見て、1323年8月に脱獄し、フランスへ亡命した[101)]。

穏健派の第２代ペンブルックシア伯エイマー＝ドゥ＝バランス（Aymer de valence, 2nd Earl of Pembroke, c. 1275-1324.6.23）が、1324年6月23日に亡くなると、宮廷内では、デスペンサー父子が実権を握り、さらに陰湿なムードが高まっていた。

というのは、エドワード２世が、デスペンサー父子とその妻たちを可愛がるとは反対に、王妃イザベラ＝オヴ＝フランスに対しては、お手伝いさんや、

99）T. F. Tout, *The Political History of England*, Vol. 3, *ibid*, p. 284.
100）T. F. Tout, *The Political History of England*, Vol. 3, *ibid*, p. 284.
101）・May McKisack, *The Oxford History of England*, Vol.5, *op. cit.*, p. 73.
・叔父のチェック男爵ロジャー＝モーティマーは、ロンドン塔から脱獄できず、ロンドン塔で、1326年8月3日に亡くなった。

デスペンサー父子の使用人みたいな扱いをしていたからである[102)]。

このような行為は、エドワード２世が、国王としての資質に欠けているということが判る。

フランスでのイングランド領・アキテーヌ公領（Duché d'Aquitaine）の小さな村、セイン＝サルドー（Saint-Sardos）で、フランス王の権力が徐々に拡大していったことに対し、その管轄地域での国王への費用分担金が、徐々に、上がっていった。

結果的に、フランス王シャルル４世（Charles IV, 1294-1328.2.1：在位1322-1328）は、1324年８月、アキテーヌ公領の没収を、宣言した[103)]。

イングランド領、アキテーヌ公領の貴族たちは、猛反発した。

このことが原因で、セイン＝サルドー戦争（the War of Saint-Sardos）が、勃発した[103)]。

このセイン＝サドール戦争を解決させることを口実に、また王宮での酷い仕打ちに、復讐の念を持ち、王妃イザベラ＝オヴ＝フランスは、息子の王太子エドワード（Edward：後のエドワード３世Edward III, 1312.11.13-1377.6.21：在位1327-1377）を伴い、1325年３月、兄のフランス王シャルル４世の下、フランスに向かった[104)]。

王妃イザベラ＝オヴ＝フランスにとって、このフランス行きは、亡命であった。

なお、息子の王太子エドワードは、1325年９月、伯父のフランス王シャルル４世に対し、オマージュ（homage：臣従の礼）を執り、アキテーヌ公の爵位を授与された。

王妃イザベラ＝オヴ＝フランスとアキテーヌ公エドワード（後のエドワード３世）は、すべての儀式を終え、所期の目的を達成した後も、イングランドに帰らなかった。

翌年の1326年７月に、王妃イザベラ＝オヴ＝フランスと、イングランドか

102）T. F. Tout, *The Political History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 292.
103）May McKisack, *The Oxford History of England*, Vol.5, *op. cit.*, p. 109.
104）May McKisack, *The Oxford History of England*, Vol.5, *ibid*, p. 110.

ら亡命していたウィグモア男爵ロジャー＝モーティマーとが、ロー＝カントリーズ（the Low Countories：現在のベネルクス（ベルギー、オランダ、ルクセンブルグの）３国）で出会い、反エドワード２世ということで、かなり意気投合し、将来のエドワード抜きのイングランドを構想した[105)]。また、この構想には、エドワード２世の利己的な政治が嫌で、イングランドから逃れて来ていた多くの諸侯たちも賛成してくれた。

この構想を、実現させるために、王妃イザベラ＝オヴ＝フランス、アキテーヌ公（後のエドワード３世）、ウィグモア男爵ロジャー＝モーティマー、反エドワード２世の諸侯たちは、1326年9月24日、第２代ランカスター伯トーマスの不当な虐殺を恨み、デスペンサー父子を権力の座から引き摺り下ろすことを目的に、イングランドに上陸した[106)]。

イングランド上陸に、反王党派の諸侯たちから大歓迎を受けた王妃イザベラ＝オヴ＝フランス、アキテーヌ公（後のエドワード３世）、ウィグモア男爵ロジャー＝モーティマーたちは、早急に目的を達成させるために。反乱軍を組織し、ロンドンを制圧した。

反乱軍は、辺境地方に逃れていたデスペンサー父子の内、父親のウィンチェスター伯ヒュー＝デスペンサーを1326年10月26日に捕らえ、処刑した[107)]。

その後、反乱軍は、1326年11月16日、エドワード２世と、その傍にいたデスペンサー父子の内、息子の第１代デスペンサー卿ヒュー＝デスペンサーを捕らえた。そして、息子のデスペンサーは、13261年11月20日に処刑した[108)]。

なお、エドワード２世は、ケニルワース城（Castle of Kenilworth）にて、幽閉された[109)]。

この時点で、今までエドワード２世が、イングランドで行ってきた政治経

105）・May McKisack, *The Oxford History of England*, Vol.5, *op. cit.*, p. 110.
・T. F. Tout, *The Political History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 298.
106）T. F. Tout, *The Political History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 299.
107）T. F. Tout, *The Political History of England*, Vol. 3, *ibid*, p. 300.
108）T. F. Tout, *The Political History of England*, Vol. 3, *ibid*, p. 301.
109）・May McKisack, *The Oxford History of England*, Vol.5, *op. cit.*, p. 86.
・T. F. Tout, *The Political History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 301.

済が、いかに最悪であったかを物語る処分であった。

ウェストミンスターで、1327年1月7日、会議が開催された。

その議会で、エドワード２世の廃位（Deposition）について話し合われた。また、アキテーヌ公（後のエドワード３世）が、正式にアキテーヌ侯爵として認めることを議決した[110)]。

そして、1327年1月20日のウェストミンスター議会が、エドワード２世からの譲位書を受け取り、公的に、エドワード２世の廃位が決まった[111)]。

また、1327年1月24日のウェストミンスター議会において、エドワード３世が宣誓し、翌日の1327年1月25日から、新しいエドワード３世の治世が始まり、1327年1月29日に、ウェストミンスター＝アベイ（Westminster Abbey）において、戴冠式を挙げた[112)]。

その後、エドワード２世は、1328年9月22日に殺害され、翌日の1328年9月23日に、自然死として、公的に発表された[113)]。

Ⅷ　おわりに

エドワード２世が王太子の摂政時代、1297年10月10日に、1215年のマグナ＝カルタ（Magna Carta：大憲章）を遵守する、有名な「コンフィルマティオ＝カルタニム（Confirmatio Cartanim：the Confirmation of the Charters：大憲章確認書）」に印章を押し調印した。この調印は、当然1297年10月10日のマグナ＝カルタ（Magna Carta）の発布になった。

この時、エドワード王太子は、王権について考えた。

すなわち、エドワード王太子は、王権を濫用しては受けないし、不法な政治はしていかないし、封建貴族の意見は聞かなければならないし、恣意的な課税を行ってはいけないし、封建貴族の権利を守らなければならないと考え

110）・T. F. Tout, *The Political History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 301.
・May McKisack, *The Oxford History of England*, Vol.5, *op. cit.*, p. 91.
111）T. F. Tout, *The Political History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 302.
112）T. F. Tout, *The Political History of England*, Vol. 3, *ibid*, p. 303.
113）T. F. Tout, *The Political History of England*, Vol. 3, *ibid*, p. 303.

た。

だが、一旦、エドワード２世として王位に就くと、このコンフィルマティオ＝カルタニム（大憲章確認書）に印章を押し調印したことを、忘れていたようであった。

忘れるというよりは、エドワード２世は、その真逆の行動をとった。

意図的に、この真逆の行動をとったというのではなく、幼少時代の家庭環境から、真逆の行動を取らざるを得なかったのであろう。

でもこの行動は、進んでも、進んでも、また戦争をしても、効果のない成果であった。

言い換えると、このエドワード２世の行動は、イングランド王国にとって不利益をもたらす行動であった。

治世の終わりごろになって、エドワード２世は、封建諸侯たちから、廃位を迫られ、それに従わなければならなかった。

このことは、父エドワード１世が賢王と評されるならば、子のエドワード２世は愚王と評されるのである。